身近な自然から見つめなおす 森と水、人とのつながり

奈良県山の日・川の日シンポジウムを開催

海に面していない奈良県にとって、山と川が身近な自然であり、美しい山と川をはぐくみ次世代へ引き継いでいくことを目的として、平成20年度に7月の第3月曜日を「奈良県山の日・川の日」として条例で定めました。今年は全ての生き物に不可欠な「水」の源である「山と川」の大切さについて、人との関わりや動植物の営みなどをテーマに皆さまと一緒に考えるため、「奈良県山の日・川の日シンポジウム」を開催しました。

◆基調講演

琵琶湖周辺の自然と人とのかかわりを「里山」という視線で追いつづけている写真家の今森光彦氏に講演いただきました。

『身近な自然を見つめる』

私が最初に自然破壊を感じたのは、小学生の頃、雨が降ると琵琶湖から遡上して田んぼにやってくるフナがいなくなったときです。フナが産卵するアシを保護してもフナは戻ってきませんでした。最近の研究でフナの産卵には増水が必要だとわかってきました。フナがいなくなった時期と、人間が水門をつくり琵琶湖の水をコントロールし出した時期が一致するのです。自然環境にはたくさんのものが関係しています。田んぼだけじゃなく山も川も湖もひいては人の暮らしにも関係があります。すべてがつながっていて、最後には人間の生活環境に戻ってきます。これは恐ろしいことです。

里山を守っていくのも難しいことです。里山は日本独自の環境で、そこに人の暮らしがあり、人の手によって、生物多様性がつくられているからです。自然とは人が手をつけないことだと言う人がいますが、オオタカは原生林でなく、雑木林に住んでいますし、絶滅危惧種のタガメは田んぼにしかいません。人と自然を分離するような考え方があるので里山は守りにくいのです。雑木林では、人が木を伐ってホダ木などに利用し、木はまた生長し、それに関わる生き物も変わってくる。原生林に引けを取らない雑木林の生物多様性は木を伐ることで生み出されているのです。里山を守るためには、単に奉仕ではなく、里山に生業を入れ、自然から何かいただいて、その結果が生き物を住まわすことになっているという仕組みづくりが必要だと思います。

奈良県で開催されています山と川の日は素晴らしいことです。あまりにあたりまえのものなので見直す日をつくらないとだめです。子ども達にとってもこういう環境がなくなるということはよくないことですし、ぜひ関心をもっていただいて、次の世代に残していただきたいと思います。

▲会場の様子

▼今森光彦氏

◆活動報告

「山や川」に関わって3つの活動について報告いただきました。

まず安堵小学校から、自然から離れてしまった子ども達に水源の森での体験や、樹木マップの作成、リバーウォッチングなどを通して、森林や動植物へ関心を持ってもらう活動について報告いただきました。

次に奈良学園科学部生物班から、広大な学校林を利用して行っている里山の整備や利用、希少生物の保護など環境教育の活動について報告いただきました。

最後にNPO法人やまと新発見の会から、荒廃した竹林の再生や竹材を利用した体験学習などによる矢田エリアの魅力づくりについて報告いただきました。

◆終わりに

このシンポジウムを通じて、身近な自然を見つめなおし、人との関わりで守れる自然があるということを認識していただけたのではないかと思います。美しい「山と川」を次世代に引き継ぐために何ができるのかということを考えるきっかけになりましたら幸いです。